

令和元年6月10日現在

機関番号：12201  
 研究種目：基盤研究(C) (一般)  
 研究期間：2016～2018  
 課題番号：16K02482  
 研究課題名(和文) 海洋文学と建国神話 - 19世紀前半のアメリカ

研究課題名(英文) maritime fiction and american national myth

研究代表者  
 米山 正文 (yoneyama, masafumi)  
 宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号：80323319  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は19世紀前半のまでの米国海洋文学とナショナリズムとの関係を論じるものである。19世紀米国は領土拡張期に当たり、開拓を中心に描く文学や、北東部、西部、南部といった地方色文学が、文学研究では主流であった。しかし、少なくとも鉄道が発達するまでの19世紀前半の米国は海洋国家でもあり、かつ1812年の対英戦争によるナショナリズムの高揚が海洋国家としてのアイデンティティ形成に影響を及ぼした。こうしたナショナリズムの時期の海洋文学が、どのようにアメリカの建国神話を形作ろうとしたのか、もしくはどのようにナショナリズムに回答しているのか、主にジェイムズ・フェニモア・クーパーの小説を材料に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義  
 1961年にトマス・フィルブリックの海洋文学研究の決定版ともいえる著作が出されてから長年、海洋文学は19世紀米国文学研究から無視されてきた、しかし、2000年代に入って英米で再び海洋文学研究が盛んになってきた。こうした先行研究で不十分であった領域を扱い、海洋文学の新たな一面を明らかにした。それは当時の国家の神話を形成しようとする文化的な動向との関連であり、そうした動向と個別の作家との関連である。海洋文学は一国が対象におさまらず、国際的な関係が関わってくる。今日のグローバル化に関わる問題(ナショナリズム、移民、人の移動、民族関係など)ともかかわり、今日的意義もあると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research aims to investigate the relationship between maritime fiction and nationalism in antebellum America. In this period, after the War of 1812 against Britain, nationalism heightened in the new nation and maritime fiction was involved with such a jingoistic trend. This research focuses mainly on James Fenimore Cooper's sea novels, *The Pilot*, *The Red Rover*, and *The Water-Witch*, and analyzes how these novels respond to maritime nationalism of the period. It maintains that from *The Pilot* to *The Water-Witch*, maritime nationalism is gradually invalidated and that cosmopolitanism is increasingly approved. Cooper's sea novels finally abandon nationalism and lean toward criticism of American "provincial" nationalism.

研究分野：英米・英語圏文学

キーワード：米文学 海洋文学 ナショナリズム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

19世紀の米国は領土拡張期に当たり、徐々に海洋交通が衰退していくため、従来海洋文学は軽視されてきた。しかし、少なくとも独立から南北戦争までの米国は海洋国家として機能していたのであり、背景には1812年の対英戦争によって生じた好戦的ナショナリズムがあった。トマス・フィルブリックの米国海洋文学に関する記念的研究(1961)の後、長年海洋文学研究は下火となったが、2000年代になって英米で新たに研究がなされるようになった。しかし、ナショナリズムとりわけ国家神話の形成との関わりから海洋文学を考察する研究はまだ十分にこなされているとはいえず、本研究は英米の海洋文学研究をさらに発展させるものである。

### 2. 研究の目的

19世紀の米国海洋文学を建国神話との関連から読むことを目的とする。クーパーなどの著名な作家を中心に、海洋文学が当時の「アメリカ人」像や「アメリカ」像をどう描こうとしたのか、また当時普及していた国民像や国家像をどう批評しているのかを分析する。これにより、海洋文学一般を論じる際の方法論の解明を目指し、さらには海洋文学が米国文学史の中でどのような位置づけを持ち、どのような意義を持つのかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究は、文学テキストを分析対象として実証的研究である。その際、作家個人や歴史的背景との関連についても調査する。方法としては、第一次資料(小説や旅行記など)の分析と、第二次資料(個々の作家・作品や海洋文学に関する研究書、歴史的背景に関する研究書、批評理論書など)の批判的精査の二方向からなる。第二次資料により、先行研究の動向を細かく整理したうえで、議論に貢献できる部分はどこか、まだ十分に解明されていない部分はどこかを見極め、自身の第一次資料の分析から得られた知見を提供することで、先行研究を発展させ、米国海洋文学研究に寄与するものである。研究は3年間に渡り、1年目は主に資料収集と整理、読解に当てられた。2年目は具体的な文学テキストの分析とその成果の発表を、さらに3年目も文学テキストの分析を行い、2年目の研究と関連付け、3年間の研究成果をまとめる。

### 4. 研究成果

建国期の海洋文学に関する先行研究を渉猟し精査した結果、米国海洋文学の中心的な作家としてすべての研究がクーパーを分析対象としており、かつ米国ナショナリズム形成期に該当するものもクーパーの作品であることが分かった。それゆえ、クーパー作品に焦点を絞り、とりわけ建国神話と関わる前半期の海洋文学に研究を集中した。3作品『水先案内人』『レッド・ロウバー』『ウォーター・ウィッチ』を対象とし、建国神話形成の特徴がどのように読み取れるかを、歴史的背景やクーパー個人の社会背景なども踏まえ、考察した。これにより、先行研究との共通点と相違点を明らかにし、本研究が先行研究にどのように貢献できるのかを明らかにした。その際、研究史の中心となるのが、トマス・フィルブリックの『ジェームズ・フェニモア・クーパーとアメリカ海洋小説の発展』(1961)であり、後の海洋文学研究もこれを出発点として展開し、発展してきた。フィルブリックの研究は無視できないものであり、とりわけ、その主張の中核をしめる「海のナショナリズム」(maritime nationalism)という解釈は、研究者にとって必須の考察対象にされなければならない。

本研究は、上記3作品の比較考察から、クーパーのテキストがナショナリズムからコスモポリタニズム、建国神話形成から神話の解体へと変遷していることを示した。具体的には、『水先案内人』では、登場人物の中に地域主義や反国家主義を体現する人物を入れながらも、テキスト全体としては主人公を中心に米国ナショナリズムが称揚されていることが明らかとなった。その理想的な新興国の神話とは、上層階級のエリートを「市民」とし、その市民を通じた制度形成、階級は厳格に保持するという複雑な民主制、家族を中心とした国家形成、など、保守的な傾向を持ち、独立戦争時の革命イデオロギーを可能な限り過去のものとして封じ込める神話の形成が明らかとなった。

その次の『レッド・ロウバー』では北米植民地の対英ナショナリズムが主人公に仮託され、英国人が持つ植民地への偏見が激しく糾弾されている。しかし、その植民地も理想的な共同体と神話化されることはなく、主人公も異様な他者として「ゴシック化」されており、建国神話を体現する人物にはされていない。しかも、植民地を象徴する海賊船は解体され、植民地ナショナリズムを体現する主人公も死亡する。一方、敵対する英海軍に所属するもう一人の主人公は行き延び、新興国米国にも貢献していくことになる。さらにこの青年はゴシック化されたレッド・ロウバーと姻戚関係にあることも判明する。そうしたことから、このテキストでは、ナショナリズムへのある一定の支持は見られるものの、建国神話の構築は試みられず、むしろ、英米の和解や、植民地ナショナリズム(革命ナショナリズム)の危険性、民主主義の危険性(植民地の無秩序状態)が印象付けられていることが明らかとなった。

最後の『ウォーター・ウィッチ』に至ると、英国海軍の規制がやや批判されるだけであり、植民地(後の米国)と英国という対立構造も崩され、両者の友好関係が描かれる。さらに、世界を股にかける主人公(密貿易業者)は植民地出身でありながら、植民地(米国)という枠を超え、コスモポリタンな立場にあり、この立場から逆に米国が否定的に描かれることになる。ここで描かれる米国は、退屈で平凡な、かつ因習に縛られる変化のない国であり、海外の世界の方が

魅力的に描かれている。ここまできて、クーパー海洋文学にみられたナショナリズムは離散し、建国神話の形成も完全に放棄されている。物語の核心は、米国ではなく国際関係、もしくは諸外国に移っているからである。逆に、米国内の慣習・価値観に拘泥する立場は、危険なものと提示され、ただ、民主主義に適する道徳とは何かだけが、普遍的なテーマとして追求されている。

こうして、1820年代には海洋文学の主流となっていたナショナリズムのテーマや、国家アイデンティティの模索は収束していき、1830年代末～1840年代になると、対英ナショナリズムとそれに伴っていた建国神話形成熱は消失することが明らかとなった。この後、建国神話への志向は海洋文学にみられなくなり、具体的な諸外国との関係や日常の細かい記述といった、リアリズム的な文学（旅行記、地方色文学、風俗文学）か、特定のロマン主義文学（宗教的・哲学的テーマを追求するもの）か、社会抗議小説（事実に基づいて制度を批判し、社会改革を訴えるもの）へと、拡散していくことが確認された。この後の時代の海洋文学の展開に関する研究については、新たに科学研究費助成金事業に応募する予定である。

## 5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

米山正文、『水先案内人』における国家像、『宇都宮大学国際学部研究論集』、査読無、第45号、2018、127-136

米山正文 植民地ナショナリズムの終焉 - 『レッド・ロウバー』から『ウォーター・ウィッチ』へ -、『宇都宮大学国際学部研究論集』、査読無、第75号、2019、185-196

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者  
研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。